朝鮮日記

後篇

四

特
へ遠13
962

門 遠13
號 962
卷 9

朝顔日記卷之七　故芝叟遺話

柳浪　著

十七回　蟲

大内介殿いうぐ思召けん遽よ駒澤ゞ閑門ゞ免さを冷泉帯刀ふ欺け置せたゞよ。然よ那の遺失ゞ責問をべき狗藤内ハ二夜獄ゞ越て晦跡たゞ。帯刀等不意よ喫一驚して。慌忙しく幾隊の快手ゞ走らせ。四面八隅草ゞ分ちて捜捕せけるさて這の緊要の遺東西といふハ。真武聖帝の尊像よして。黍くも當家の曩祖琳聖太子。高麗の國よ渡来たまひしゝ長く家の守護神と崇へたまふ。從来奇異の霊驗在により、時と称く紫禁よ大内氏よ鳳詔くだり。即這尊像と廟堂

設けらるゝ。妙見霊符の大醮を做さゝるたゝへ、その穣法、代々
當家の主たる者。修め来るゝ所なり。先項那の尊
像の一軸失て。何者の所為といふことを志らず。倘もその事
禁廷に洩聞えねば。由くき家の大事ならんと。長臣の們
眉をひそめ。各安き心もなし。先是駒澤に寛の難題を云
かけたる修験伽縷羅院といふハ。這の國の僻處三田尻と
いふ地方の民なるが。一個の母親に事て至孝なることいふ
ばかりなし。こゝに兄弟徳兵衛と喚做者を。隣郷なる做
敗布的何某が入贅にはゝ。母ハ生得ていと古怪き
好潔の毛病あて。平素こづゝら洒掃のみとこゝし。こゝ
飲食の類もいさゝか不如意ことあるをば。そのまゝ嘔逆

發して。終日絶穀さるもまゝ多かり。伽縷羅院ハ深く是を
歎き。只顧母の業舞。掃除ハ勿論。飲食るんどゝのかぎり
叮嚀に物しつ。されど自来その家貧しく母を豊に飼養
ことあたハず。母の嘔噦發るごとに涙を流し。自己が孝養
の煖飽不得を歎息せり。おなじく知音の人に對時ハ滿腔
子に咄める遺憾を洩し。あハを一二百両の金子もらふ母を
安楽に養ハんものと。今よりあれ大金を損して。人命を
購むる人もわらバ。己が一命と交易たきもなり。といと
皺面にぞ語とぞ。さるほどに山岡玄番允ハ。己が大望の妨
るゝ。駒澤次郎左衛門と仔て墜さんと。多方計較てありけるに。
先是在京の時色慾の為に散財出醮。荻野祐仙自光山岡が

郎より親多附翼せしが。忽日来て物の序より道やう。世よハ希有の望せる獣呆し侍てき。近来小的許より請治より来る三田尻の者が申をふハ。それが街坊より伽縷羅院といふ修験あるて。てふとぐ孝心の者より侍るが。自己貪しく母親を養ふ不如意あるふより。自然好事の人うて大金もて交易人と望まバそのまく性命を沽んと申すよし承ハてき。と無心の雑話を。心ある山岡玄番聞よりも。許頻より心頭より上まうあい最屈竟の事なり。隨即祐仙と閑處よりまひき。何事ら密語をぞ恥ける。舊這の祐仙も。駒澤と戀の敵と深く嫉ま。蚤より山岡が逆謀より荷擔せしゆへ。今山岡が吩咐をバいと容易領承ぬ。もうて祐仙ハ詣且辱食て。山口の府下をたちいで。只管西と望んて走ぐるが。未牌よりとや三田尻の附郭ある出村といふ地方より鑠とある茶店ふたちうて憩息其許の店小二と央を三田尻の熟人へ折簡が齎せ差しくるが。幸宿より在けるら待程しもあく。那の伽縷羅院ある者出来ぬ。祐仙ハ欵待し在つまバ。やとら酒ある請めいと寛語たふうへ。和僧ハ憑金より命が沽るくと聞侍しが。そいいく實定より侍るら。今爰より百両の金子あり。菲儀よても承引たまいぐ商量しあひねとて。伽縷羅院聞て。こハ從来望如る百金とぐより賜らバ。如何より愚僧が狗命を購申をべしといと苦もふげより允容れバ。祐仙ハ最早く事就と悦び和僧の命を買得由ハ緊隠密より壁耳を憚るあるそハ施主より直より聴る

べし。いざさらバ斤時も早く伴ひ歸るなんと。忙ハしたつるゑ。伽
縷羅院。さバまづその金子と收落申し。一田弊院ゑ歸り
舎弟ゑ百般付属とき。闔家の眷ゑも這の金の出處ゑ
怪まざるやうゑ申しきらせ。直田して来りゐんとて。祐仙
ハさどう惹東西ゐまバ。その飜悔せんことと放心不下て
半晌猶豫状ゐる ゑ。伽縷羅院熟視て。今日ふん邂逅
夙志ゑ遂たるゑ。自然變卦ゑも遇んうとほどくあやぶ
こやをら店小二を呼たて道やう。愚僧些の仔細ありて
那の醫師殿ゑう為替の金子ゑ拿帰るゐう程ゐく又
来りてその事を辨じ侍るゑ。露ばうも齟齬いさふらハ
ず。霎時往来の間ほどハ。和主ことを為證てたびねと謀て

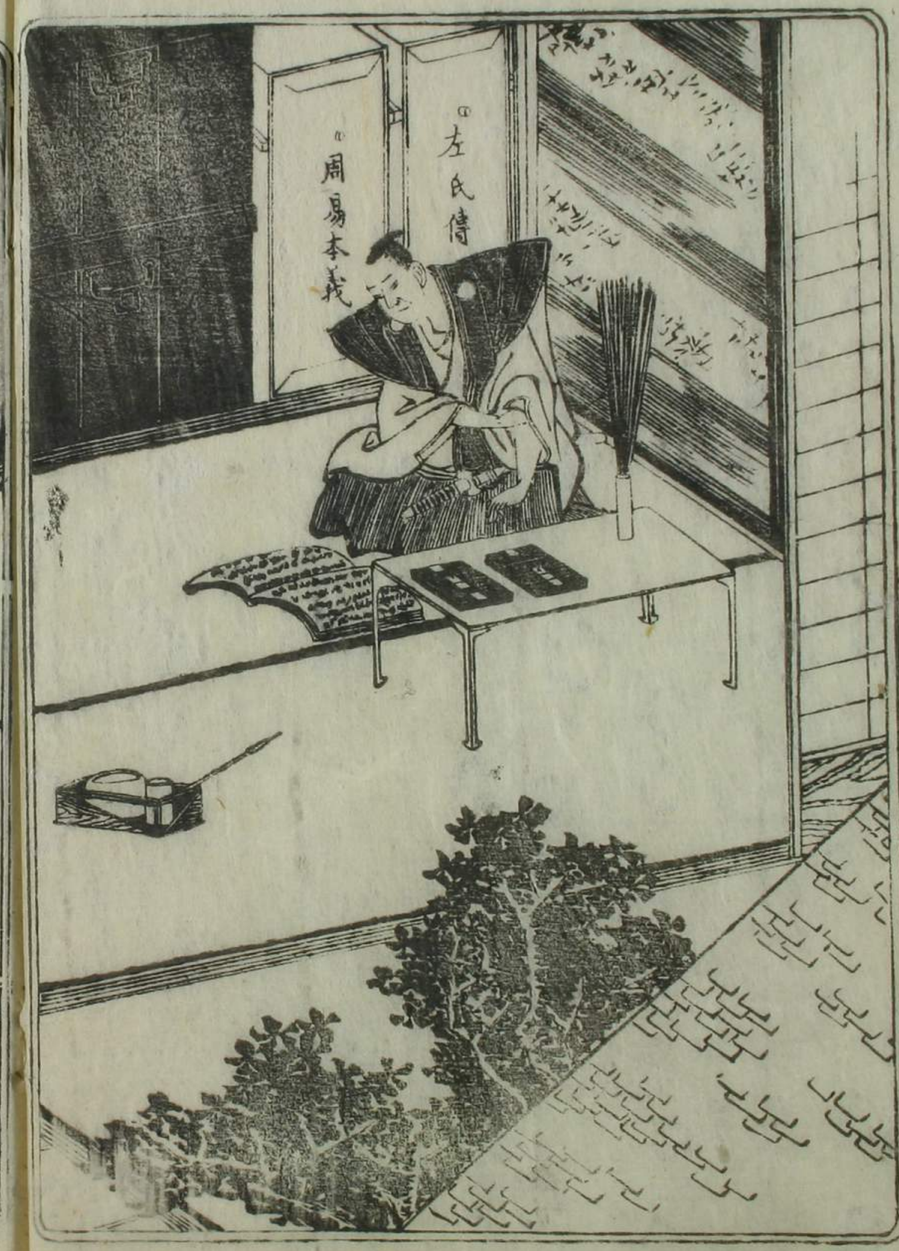
托けるゑ。店小二ハ恒ゑ伽縷羅院ゑ篤實ゑ熟識居ゐバ
快よく允るひ。祐仙ゑ對ひて種く附語をゐをふう。祐仙
も只得承引てゞう。伽縷羅院ハ祐仙ゑ迦せる金子を懷ゑ
きて。這の茶店をたち出。直ゑ本院ゑうまうて道るいさて
も今日ハ造化ゑることとそあまき。待バ甘露の日和あるとい
ごとく。今般皇都の土御門家ゑう。扶桑六十餘州の陰陽師
どもの系譜御紀しあて。胡論ゐるものハ没入らま。正道ゐる
ものハ牌符と下さるゑ。或の吹噓ゑ由。不思議と市看顧しゑ。
遇う。我へハ鎮西道の査差ゑ赴るべき命ゑ蒙ゑき。それゑ
ほきさる御幹ゑて遽ゑ召ゑバ唯今ゑう鳳闕と指て起程侍る
ゐう。調度どもハ日後申し下をべしと。一曩の百金と居めハせ

たる徳兵衛よ遍し、這の支度金ハ汝よ付與ふくぞ。起先孺人へ邦不自由させまゐらせし代り。什麼ぶりとも好ませ給へ東西とも買へて請まいらせよと。ねんごろよ托ぢ母へも告別を申し。上洛せんよハ駿の二光とも遂てるん。好く信よ在せ。こゞ發跡て僧都ともゐて發旺歸省ぶ待たまへと。口裏よハへど肚裏よハ。さを今世のうれと思へバ。涙盤渦来て胸うち潰たをど。不悟まゝと衣紋刷くて紛らしつ。母も餘波ハ惜しられども。愛子の出世と聞うらよ。ともあらバ早く都より還り来て。老が倚門心と慰よと。離の盃酬ハし。大家啓行を見嘯し。その後伽縷羅院ハ金主の山岡が命を守て。駒沢小寛といひけ。渠ぶ分説の滅口し。舌噛切て死なるハ財の料よ

いひるゞら。無慙とゝも憂うう三田尻なる母ハかくといざ知ず朝夕陰の膳ぶ排。指を折て日を筭へ。その消息をまちうねぶ顧その風声のゝして想ひ煩ふ。又這の修験ぶ弟徳兵衛ハ義家の双親早く亡てその妻阿茂と乳臭兒と。嫡親三口の過活よて。些本銭なる木綿商買の牙僧よ閑なく。伽縷羅院去て後ハ實母ぶ已ぶ家よひきこうて。阿茂と共よ侍き事ぬ志うろよ頃忽然として徳兵衛母子。一般の異病と受て惱ゝう。毎日午後ゝの悪寒ゝして大熱ぶ発し。遍身疼痛ゆて宛うと蝮蠍よ螫ゝぶ。ぶ常痛風ゝるゝで。来て診ほどの醫ども。一個こして什仄の病因ゝいゝことをゝうゝど。あるぶ中よ老功ふる一醫熟察。両個の病者よ磐水を飲しゆ、まゝと生豆を食せて験るよ。母

子ども醜美とうち食て些も腥らぬ形容あり。老醫ゑれを看て。原来疑もあき邪祟ぞう。中く藥石の治処ゑ非ずといふ。看病ゑ在あふ瓜葛の者ども膝をくめてぎもうらべ如何ゑして佳んと議るゑ。老醫いへらく。凡鬼注ハ加持祈禱ゑて禳驅ことハ多う。ふしども何の邪魅とふことを知ねバ。験者もせん法ハあらじ。足下達も聽をしる。這萬土御門家の内ゑる佐伯少進入道一清軒といふ者。山陽道陰陽師査の役者として下らき。萬代沼村の庄官ゑ寓つて居らるゞ。その易断鬼神不測の妙あると風聞す。こまふかくまゝ那人ゑ筮判を請ゑて見らきゑバ。根由も解ゑんと勸めけるゑ。徳兵衛ハおもをもて。萬代沼ハ僅半里ゑたらぬ所ゑ。朝醒の間ハ精神も行歩も常のごくゑるきバ。一田往て乞てんと。黎明とまちて。夫婦もろとも稚兒を携萬代沼の庄官ゑ許ゑ至り。一清軒ゑ謁て。自己母子ゑ難病の状をぶげ慇懃ゑその明断ゑ請る。一清軒容易諾。即坐卦を起ふ山風蠱ゑ得たり。一清軒眉うち皺め。コハ山風蠱として。三毒盤上ゑて相食の兆あり。熟卦面を味るゑ。是必足下達の骨肉ゑ。大隠居の惡業ゑ做しるその天罰的顰ゑ中ゝて。かくる狹ゑ罹るらう。その惡業ゑ造ろとふい。今天下ゑ名たくる有道の大賢人ゑ。冤の罪ゑ隨さしめたうとねばゆるゞ。天道ハ善ゑ福し。悪ゑ禍す。その賢人ハ天ゑ應じ人ゑ順がひ國ゑ富しめ民を愛せる善行あるゆへ。上天心ゑ應たる徳者ゝ

木綿屋風流
一清もり
易聞こなし


左氏傳
周易本義

志うろと凡愚の身にして悪を與しその人を害と做したる餘の殃はみなそもゞ眷族に及ぶ。おを全く天公の所悪深ら
る故なり。今筮の兆に據バ不小可毒祟なれども。足下母子
とも。早些那の賢人の寛を雪んと苦思深切ふらバ。蠱の毒勢
稍緩つるし。登時下官が家に秘たる法を修して。両個の鬼
注祝禳除て與せんとゝ。自来老實の木綿屋徳兵衛これを
聞て信疑相半。谷粘に申をやう。先ハ筮考たまり感激
侍る。雖然爰に一個の不審のい。賤人が骨肉の者にもかぎり
起先露不仁無道の悪行を做せしもの覺侍らず。とのひ
出すを。一清軒こや不消分説て。非學者論に愉をとゝ
ゝてあり。今徒に爭論も詮なるべし。早く回りて
母儀にも量見玉へ。中意事も出来るんといひ捨。餘の来
客に應對しつゝおの時こや請筮人夥集合バ。徳兵衛夫
婦ハ一清に對て厚く謝礼演。一封の筮儀と措て起いづ
かくて徳兵衛ハ家に帰。母に一清が兆の説を語る。母と
一向不會せず。一清軒殿の易術ハ。百斷百中とい声言せ
ども。只此ハ不占得なり。先闔門にて試説見んに長児の
伽縷羅院ハ。虫も殺さぬ誠實もの。海達夫婦の孝敬厚ク
ハ。おの老が肉眼にも歟ゝ絮語うら。早午の貝吹比にもるて
例の寒熱去来りして徳兵衛と一時に。遍身毒虫に噛るく
がごとく。痛疼きて悶苦むこと常に倍せり。徳兵衛が妻の
阿茂ハ。種ゝ介抱して在しが。やとらット起て抑眉朝天眼血

黙て罵ら〻。余を誰とうおり〻伽縷羅院るるぞよ。我痴はし
て只一途よ。孝養の為よと双親の遺體ゐる性命を代よし
知ぬこ〻いいひゐら。悪人の大逆よ荷擔し。精忠至善の
賢者とゞ。我故よ寃の難よ苦めたり。その業孽輪轉をう
〻〻報来て。死てハ泥梨の地獄よ隨、剣山氷池の刑いさらふ
て。無量の苛責よ苦むぞよ。やよ舎弟いざ我よ替りて。疾那
賢者の寃を雪せよ。さうらば罪障頓よ消滅し。冥府苦患
と解脱せん。コハ悲しゞやゆ火の車よ載て往ハ。あら熱や耐ゞ
たやと。吽も敢ずゐ民ハ度と仰倒よたとれて。半晌不省人
事ぐりり。母子ハ毒氣の和時よて。きの挙動ゐ看ヌその
饒舌を聞て且驚且悲。今こそ一清軒ゞ説ところ。露ぐりも

違ハざるハ。共よ凛ゝ明断の物然ゐると感じ。天明を待かね
使を馳て一清軒を請じりるよ。一清軒轎よ坐て入来ばハ。德
兵衛、礼〻しく出迎て草廳よ請し。席よ額を突てうち畏
妻お茂ゞ死霊の附語を青天白日よ告。大人の明断と符合
せしハ。よも凡人よハ在ざしと。昨日の不敬を謝〻。小人母子
ゞ邪祟とざよ禳除王いるバ。時日を移さず。賢人揉の雪寃
と議れ、んと慇懃よ請けるバ。一清ハ德兵衛ゞ誠心ゐすして
ふまと允じひ。やゝら重くの俎豆を排へ燧火を點させて壇よ
登。ふらく円数を凝し。泰山府君の法とゞ修したり〻。前よ
てをでよ大熱発て。遍身こゝや痛疼出んとせし。例刻ゐるよ。不思
議や那の穰法の奇特ゐら、を。德兵衛母子ゞ蠱毒ニ仗よ退

散〻て。苦痛ハ其の餘波も揚ずおもて。心神爽さと日比よ
優て覺る。骨肉のものハさらおもう。坐よ在かうりハ擧合て
雀躍ことかをてれ〻。老母一清。對てその勞ハ謝〻。今迚
ハ不公意侍ら〻ば。児子伽縷羅院といへる修驗。土御門様ら
西國方隱陽師査の役ハ蒙て。俄よ召きて帝都よ上り候し
ば。一別弗よ音耗を聞侍こず。貴客ハ土御門家の御差使と
承りべきこバ。豚児と一般御任形り。定てその事知召きん
若ハ大人の御吹噓よやあらんどらん。昨日娘ハ附語よ豚
児ハ黄泉客と成りしと聞る。老いたる不小可れ乱て
侍るよ。とい干係げよ問うけらを一清軒殆訝て。陰陽師
等の査差ハ。下官その惣裁判の蒙をバ。大八洲内きを

于て知ぬと云ことおれ〻。令郎の名さへ今ハ承て初るる
小。そハ可怪ことおれき。と半晌沈吟せ〻ば。掌ハ端とうちて
呀原来卦の兆おるうり。令郎いうよ駕實の質形りも人
の為よ欺負まて罪做せらを〻も計らをず。といまゞ語も
果ざるよ。稠人廣坐より誰うハまうど。大人の御語よたきて
思ひ得ぜ事のい。頂山口の御館よハ。什庚の御紀明ら一個
の修驗者を責殺〻給ふ由。適間きの風説とうけたきう
きこと。道出せり。かくる時の習て。古怪の叟ハ。這家の伽
縷羅院殿平生の口吹よ。命薄まて斯貧寒過活バ母と
安樂よ養ふこと遂ハず。あハき今世よ大金と損〻て命と
買人と云人もあきハ〻。一員の舍弟持られバ。母と看顧よ

事を欠ず。我ハ命を縮めても親を不自由がさせじとおもひ
謂らきたまと。骨だの肩ハ奪しての〻ちろよ。又ある農戸が
伽縷羅殿ハ前日出村茶屋まで生ぬ醫者殿と坐久對話
せらるる一包の金子をも拿歸らるるかをきくり見うけぬ
ぞあやしくれと。店小二がたぶやきたゝと居丈高まねさて云
さいぐ。母ハ適間うるさいの種々の言説ハ聞て韓と胸ふさがり
餘の悲さに涙さへ出もやらず。歯の透と漏声のいと澁拙て
さらばその責殺さまこる優婆塞ハ極て豚児の伽縷羅院
ゐらん。母と養ふハんとの健氣ゐる誠心もいらに孝行ゐをバ
て。命と活とゝやふふいとがのるものゝ。とい知らぬ〻て
由〻に。珍膳美食も児の肉。見るも可悪聞も否。今の数に

比へてい。錦の襁も鍼の筵。おとゝが安樂どころや。殘喘ゐる
さの母も。刹那に遅つくぞよ。情ゐき長児がふるろや。孝行か
へつて不孝とゐるしぞ。宜しも門を出〻ぶとゐく。そゐ
後影の透て。物哀に想ひ〻い。もくる憂目ハ看ん識ふもへば
想へバ惨酷やと。展轉て泣悶く。徳兵衛夫妻も共泪と
ゝこゝろうて母親を介抱。種々と慰ゐ賺ゐをバ。流石老人の
例。後果ハも志淺らず。徐く涙を斂て。清軒が膝方に
躙ゝよう。既然死者ハ悔て回らず。やに徳兵衛汝も亡
魂に托語たる悪人ぞらの隱謀を顯し。賢人様とやらん
の寃と雪〻まいちせよ。亡児が為ゐいこゝに優る供養ハ
あらじいざ早く冥府の苦患を助やゝ。又眼底ゐる仇とも

報ひとしゝ。ゐるまと一清大人。爾せんよい何如よゝて可んそのの風状よゐるべきおと欤。次児めるふ欤委く訓へて給ハきと只願たのむま。一清ハおを欤うけがい又互卦ふどと併せ考へ。徳兵衛と近づり先方位ハ這里より東方よあたりて程近ク大都會と見ゆきバ。極てハいを山口より。さあきバ早く山口の検断所よ出訴とゐして。令郎の命を活きたう縁由と上票対手の検査を願ハきふバ。必勝利うとがはなこの所以ハ山風蠱といふ卦ハ。内卦ハ風外卦ハ山ゐり。往古周の代よ秦伯といへる諸侯ある。その國の東よ隣る晋ゝ〳〵國を討んとて筮してハの卦と得たゞ。秦伯こを見て蠱ハ忌ゝ兆ゐきバ今度の軍まづ止んと議せらをゝを。易者曰やう。吉し時今秋ふきハ。西より東よ之よ利し。外卦の山よ内卦の西風吹中て。その山の枯葉を吹散す象ふきバ極めて御勝利あるべゝと断ぜゝるバ。秦伯ゐれよ同意ゝて晋欤討て大よ克と得らをたるその例もあきバ今足下の對手とらるべきハ。十分猛烈ある大敵ゐきど。その運數漸盡なり且山口府ハ這里より東の方ゐり殊よ今秋の末ゐきバ西風山の凋葉と吹掃をゞゞく。速うよ工成べし。如あきど其間よ不意驚駭よ奏功ハとあらん。不妨ぬことゐり。そハゝゝと勿惟の僥倖とゐりその事ようして令兄の屈死の縁故も明白賢人ハ雪冤て世よ出らをて足下もやゝとその人の庇よ由好造化ふ遇るべしかゝらを疑ハるゝハと勿をとそいつりる。

十八回　狩

雲ハ龍ヨ從ガヒ。風ハ虎ヨ從ヒ。明君と賢臣と一時ヨ奇遇ること。世ヨ希有例ぁり。大内介満興朝臣いその初猛烈の君ぁりしが一回駒澤ガ諷諫ぁ容ひさせ給ひより遂ヨ武文兼備の名將とハぁりたまひぬ。さきバ駒沢ヨ学び得らまる政要ども已ヨ所行きて。分國の軍民總てその御仁澤ヨ浴るまいとい知召ま猶且ハ渠ヨ授ヨたる兵法の機變を試ミんと俄ヨ仰出さまて。三田尻の奥ぁる猛虎嶺の裾野ヨ射獵ぁ催させたまふ。當日ハ介殿まど夜深きヨ館を起行あヨて御頭ヨ飜花の裏箔の笠子を戴き猩々緋ヨ蜀錦の玉縁ま〻る陣外套を穿け背の小箙ヨハ數の鵜矢を納。あざら

の行騰を着月毛の駒ヨ跨ヨ。一手ヨ繁藤の弓を拿せらまて多聞樓の下ヨ半晌立せたまひて前面を屹と眺望したまへバ。侍衛の人くいさらう陪從の士太夫次叙ふ准て歴々と綺羅星宿のごとく蹲踞たるゞ。軍馬ともふ些の声响とさへ做さずいと森々と嚴肅ヨる狀ハ洵ヨおれ紀律の中度ぁるヨ由ヨとおぼゆ。駒澤ハ希代の軍師ふヨと。暗く称奇在してそのまゝ腰ぁる軍配扇を抽とヨ御額ヨ翳ゝ給ふこの太骨の消金の扇ヨ朱の日輪を描たるヨ恰好東の天よりとし登ぼらう匂へる嫩紅の影と相映て目も綵ぁるまで暉くぞヨえたり這ハ改觀と看るもあり或ハ好奇こと做したまふよと冷語ものもありて一軍

總て恠こ駭らぬものもおろ〻る。大内分殿ハやとら手納うひ
〻り徐〻騎歩給ひるる。猛帛嶺の山脚まで三里餘の路
上弐箇も武者押のごく。隊伍整くとして聊も乱を間ひとゝ
ゝとおし。かくて設の御假屋ゝ入せらるて。霎時御憩息の
らせらるぬ。登時午影戴笠あるバ。とや御晝飯喫しら
さるらんと隨駕おる長臣輩ハ鞠坐の光景を覘奉つるに、
殿ハ將ゝ至るまゝ。御手自佩糧とてふくやうおる漆
包を披らせらるたるが。只燒飯ゝ香漬と乾肉梅とのみ
殿ハこゝを甜美と喫させ給ひ一杯の馬柄杓の水を飲せ
らるてゝたるを見より。人〻呆をまどし。且慚且怖て齎
せ来る行厨ハ美味を悉せ〻さとおるをバ。君前ゝ出す

おとかるハず。個々たゞ空腹を抱て躊躇居るゝそ、殿ハ最
恠しと思し。汝等什麼故ゝ午飯を喫べずして猶豫居ぞと
曰ハするゝ。冷泉帯刀衆ゝ抽て。臣等が輜餉いまゝ来れハずと
稟おく。殿聞〻召るて。そハさぞ迷惑るべし。と即近臣ゝ命せ
たけられ。臨時御豫慮ゝ準備せさせたまふる佩兵糧ども弐
駄〻運び出させらるて。人〻ゝ顧與へ給ひる。人〻感激し謝
稟おけて。いと珍らしくも粗食とおん喫べる。因ゝつゝ後来ある
卯月の初つゝ。櫻川の水上環翠が潭といへるゝ漁を催させ
たまゝ。這櫻川の溢鰐ハ山口の北畔おる曙山弥勒が嶽望高麗
山〻〻落合て巨浸をおし。外郭の左側と流る〻大河ゝ。比先へ。
まの川年く洪水溢るゝ。両岸の隄ども那邊這方決て沽可の隴

畝を壞けるゆへ。こゝを纏へる邨落ハ殃を被ること不ト可かれ
バ河破ハ左右の隴畝より高きおと幾大餘ヨおよづりぞうりに
駒澤次郎左衛門ハの禹功を役ゆ蒙りしふぢ源ふる彌勒ゞ嶽
の赤瓦ヨ雜木植。曙山望高麗山の伐疎たふ間ヨも
萬千の樹を植副以後て杣父樵者の入ことを堅禁せしぶ。
那の諸山年ゆ經て欝葱と繁くたち畢ぬ。おまゞたらヨ三
伏の日ハ雲氣凝濕て。時とふ、白雨と降しるゆさへそれヨ
ヨハ更ヨ旱揖の患ることなかりき。又源流より土砂のくだを
ふゞるゝこといらぬバ大雨後水の激勢ヨ從て自然河底鑿通
て。當初のごゝ底深く成りふ。或ハ駒澤ヨ問て曰く。足下
の治河せらるゝ。修堤いち早く成きるのゝまらず。二面

決壞ことなきハ比類なき手段ゆと深く感服たるふ駒
澤道ゆ在下として別ヨ奇き策も侍らず。唯その各處の父
老どもの才勘める者ゆ簡。そをゞゝヨ任て令とゆし侍て
しるゝ父老どもゞ告ヨハ明日の公役ハ馬蹈を修らふ土カ作
ゆをバ。人夫ハ何の村ヨ充させたまへとゝふ。又その明日ハ根廻り
と堅むる力作ふをバ某地へ出夫ゆ觸させ給へとゝふ。そを
等ゞ指せる處の民を役使バ。極りて成事くるよ。とぼる況
耕耘ヨ熟せるものと夫ヨ。ゝる。石材木など搬運ヨハ山手
の斫石かどヨ馴たるものと使ヨ空作を做さぬゆへヨ。若ゝ
けんと對へらをき。さても大内介殿ハ環翠ゞ潭ヨ赴うせた
まへ舟行ハ潮洄て迂遠バ。例の御馬ヨ召をて。やその地方

より臻まで見たまふに。那の環翠が潭といふは大きやうなる豬ゐて雄手雌手の翠壁は宛も削成がごとく。緑樹は孫が上にたちこめそをぎ間〳〵白躑躅映山紅の類爛珊として美きを趣あるて画に描ともおよばじ。惟の巖の灣曲には紫の幕絞せたる大座船を繋ぎてあるは。御還の支度なりける。那里ふ嶋あり方二丁ばかりの芝生あり。今日は日もよく晴て松ふく風いとをぢし。その時影の漁戸どもは。嫩鱉の群来まて瀑の汲を登るこころ。小柄網もて奥より流れ出る残花と共に汲ひあぐる魚業の好光景。さて潭底より大偉き鯉魚を左右に按ぜさせて泅あぐるしあるて。いと興ふかし。殿は芝生に五色の花氈を敷せて。銀の茶行厨描金の携盒ども。光絲奪目に水陸の珎味玖悉さしめられ。王觥に盛る美酒は琥珀の色をるん歎ける。酒酣なる耳熱て。大内介殿尊意和暢いしく

夕日さしかたぶくの松の下にしきいはなをさうかう

とロ號たまひけるを。羣臣もまた隨意に詩と賦歌を詠うは御輿をそへ奉るふぞありける。殿は廣坐を流肝たまひ。汝等もけに川逍遥の伴をひれをが定て趣ある佳肴ども携来ぬらん。此二憚うらずしてこをへ出せ。えまほしさよと仰せらるる。人〳〵は去りる射獵のこゝさよ懲せ〳〵とへ。今日はぬるま〻と。大家相約るう如く佩行厨にて来りるが今の嚴旨を承て個々面を着ゐはせ。半胸頓ロ無言て慚愧ぬ。殿は長臣どもが旰為を御覧たまひて笑容可掬玉ひしとぞ。人〳〵はこの〻殿の什広しも詰たり

大内介殿
猛虎嶺の
麓に射猟
を做し給ふ

御挙動はなけれど漸内省ありて。實是今日は寛さる川漁の御遊
みるよ。趣向せる下物さへ准備せず。剰軍役らおるハ猪狩ホ出る
如く。突兀く打扮らるゝを悔しれ。今ようハ兎よ角よ時宜の
緩急よ用心ぞきさいとまりとてなのれと蓋想て。殿の温和なる
御徳よ化せらるとおん。是ハこゝと後話るれども筆の序に
記せしものおりかく閑話よ絆ハりて原柄な説晩つ。さても
大内介殿ハ簾下を将て猛虎嶺よ狩入たまよ。壮健ども前
と争ひて馳蹄る。殿ハ萬般駒澤ゞ指揮のぐ〳〵節制ありて前
日の未牌よ下令せたまふよ。此日の昧早よハ列卒よ指もとる
界隈の里民ばっ跑聚峰々谷くよりも鼓うち躁時々関とを
らりふどて驅逐かさしも。扈従の侍ハ器械ともて野猪兎鹿
猿の類を射斃刺斃各勇奮な顯ハしる。殿ハ機會な
見てづと山を馳下て。とあるし小堆き阜よ馬を立らも。今朝
御出馬の時と齊〳〵。那の日輪の金扇を真甲よ翳し玉ハ
落るとおる斜曛よいまぐ〳〵爛たり。那処這処よ散在おる
篝下の衆こまと看て。瞬くうちよ馳聚。御馬とハ重ょ簇
擁して真黒よ備たるハ。鉄桶よりも堅うるべし。初殿の軍配
扇を御額よ支たまふて。假意士卒よ異風よ想せられ
一時の機變といへものまと。今班軍よ臨を。今使を待ずして。
胴勢を頓よ集り給ハんとの御試うらし殿ハ山口指して帰
せたまふよ。御後隊の大身衆陸續相退一隊一隊ばく。初のや
うよ聊ら次叙を乱さずいと〳〵嚴うよ見ゆ。さてもそのゝち木

綿屋徳兵衛ハ。二清軒が教に任せ。斤時も早く山口へ趣て
叫屈ぢやと。此日家を出て出村迄来るが。這里の茶店の店
小二とハ親しき友垣なれば。よりて寒温を叙し〳〵。兄
伽縷羅院と伴ひたる者の容貌を精く問けるに。あの
時しも御還の行装拜んと。這の邊の農民ども殿〳〵集
合来りぬ。店小二も人に誘はれて出ぬ。徳兵衛ハかゝることに
心涼ねば不管好歹に跟て村口までいたりるゝや隄の
左右に附て尻坐居る。徳兵衛ハ家艱に
纏らひて今日の御狩の巷説も朦朧なれば。飄然今かく出で
かけるに。官道ハ遮行人にて車駕果までハ往来うかハずと
ふん聞きバ只得人叢中に在て熟視居るに。早御胴勢

も過完て廻の後に後押の一隊のみと見えしかバ。羣聚の者ハ
四分五落に散ぬ。事有湊巧、荻野祐仙も今日の扈從の
後に在るが。行次遲て漸只今この處と經過くると。彷徨居
たる徳兵衛が後背より。徳兵ちとを前日令兄と伴ひたる
人形と指教ゆ、徳兵衛ハ聞より血眼になりて走りて。
矢庭に祐仙が脇を捉へ和主ハ前に家兄の伽縷羅院と伴
行まし〳〵什庄等の幹にて。家兄ハ何處に居侍るや早く
在處を謂まよと嚷るなり。祐仙ハ喫一驚せしが不知状
ふ假作、你ハ何奴なるまバ。余に向て傷觸を做すぞ。我聊る記
得なし。誤認に但ハ風魔なるか。と力を極めて推跳すに。徳兵
衛ハむゝやぶりつゝて放やらず、千濁賊萬騙局ハ〻罵合て

互ゐ舌戰最中なるゞ山岡玄番允ハ馬を驅らて押来ゞこの光景を看咎めまゝ徳兵衛ゞ罵る語をきゝよハ身の上の大事発まりと即家卒を喝しそゝ痴蒼ゞ破隊する無扶漢駅く細まと令られバ跟隨ゞ重壓て係ち徳兵衛を捕て押へ高手小手ゐ細ゞ猿轡をさゝめさせ已ゞ胴勢ゐ籠て牽せゆく茶店主人ハこの頭勢を看より肝を銷し連累てハ齷齪と足とも空ゐ逃ゝ

十九回 のうの虫

秋の夕のたゞ暝ゐ暮て山岡玄番允ハやゝやく已ゞ邸ゐ回直ゐ徳兵衛ゞ内庭ゐ牽出さゼ呀祐仙其奴ゞ懷裏を撿見よと道祐仙彼と應て徳兵衛ゞ懷裡を抓探るゐ果して一通の文